

『新編 日本の面影』を手にして

藤原 道夫

コロナ禍が拡がる 2021 年の夏に、文庫本『新編 日本の面影』（ラフカディオ・ハーン、池田雅之訳、角川書店）を入手した。この本の初版は 2000 年 9 月発刊、求めたのは 2021 年 4 月刊行の 27 版だった。新編とした理由として、訳者はハーンの原著『Glimpses of Unfamiliar Japan』(1894)にある 27 篇の中から 12 を選んで新たに訳したと説明している。

この本に気がついたのは、「桂離宮を巡る」を書きながら外国人が日本をどのように見てきたかについてアンテナを張っていたことによる。入手した本をめくりながら「日本の庭について」の章に心が動かされた。また「盆踊り」という章もあり、以前に強く魅かれた「おわら風の盆」のことを思い出した。

ハーンがアメリカから日本（横浜の港）にやって来たのは 40 歳少し前、1890 年（明治 23 年）4 月だった。その頃の日本は西洋の近代文明を懸命に取り入れており、伝統的な文化が徐々に失われて行く時期に当たる。来日するまでに、ハーンは日本に関する文献を相当に読み込み、日本に対する憧れを膨らませたようである。特に 1871 年ミットフォードが著した『古き日本の物語』に惹かれたようだ。その本の中から『日本の面影』の冒頭に次の文を引用している。

「最近の日本に関する書物は、官庁の報告に準じたものか、通りすがりの旅行者が残した、うわべだけの印象に過ぎない。……日本人の宗教、迷信、思考様式、彼らを突き動かす隠れた原動力—これらはすべて、いまだに神秘のベールに包まれている」

ハーンの日本文化に対する思いは、単なる好奇心 Curiosity や関心 Interest を越えて、敬愛 Admiration や尊敬 Respect の域に達していたことが伺い知れる。彼は見て感じたことを素早く記録する才能にも恵まれていた。横浜－松江－熊本と 2 年の歳月を過ごす間にすっかり日本のとりこになって『日本の面影』を書き始め、4 年後には英文の単行図書として出版した。

今後、この本のなかから「日本の庭にて」や「盆踊り」など、心に残ったことをいくつか取りあげてみたい。